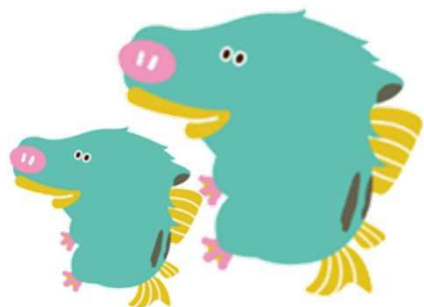




矢作川流域圏懇談会のゆるキャラ
「はぎぼう」

第16回 山部会まとめの会

第14期の活動成果と今後の活動計画

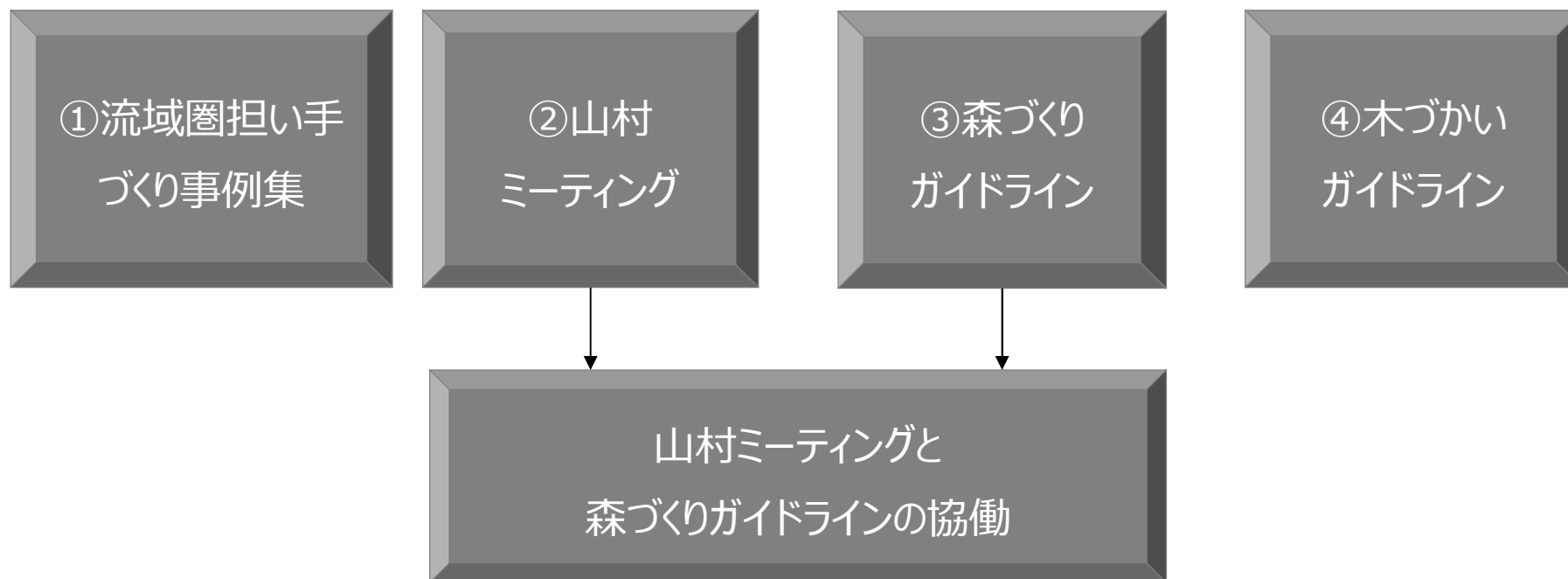


次 第

1. 今期後半の活動実績
2. 山部会の活動目標

1. 今期後半の活動実績（R6.4.1～R6.11.30）

次の10年を見据えながら、山部会の展開を模索するとともに、4つの活動テーマ（一部、山村ミーティングと森づくりガイドラインは協働）を軸として、情報共有と意見交換を行う。また、他部会との連携を通し、流域としての課題解決に貢献する。



※例年は年度末に実施する全体会議を区切りとして年度ごとの目標を設定していた。

昨年度より11月に全体会議を実施しているため12月1日～翌年11月30日の1年を1つの期として整理する。

今年は設立から15年目であり、昨年（14年目）は中間報告会としているため、第14期の継続中とする。

1. 今期後半の活動実績（R6.4.1～R6.11.30）

流域圏担い手づくり事例集（テーマ①）

○流域圏担い手づくり事例集交流会2024の実施

2023年度は海に流域の問題が集約されるとの思いから、初めて伊勢湾・三河湾の豊かさをテーマとした「流域圏担い手づくり事例集」を発行し、第54回海部会WGを兼ねて事例集交流会を開催した。会場の鳥羽市立海の博物館には今まで最多の41名が集まった。多様な取材対象者と寄稿者、関連する活動団体の報告を聞き、意見交換を行った。

事例集交流会は2日間に分けて開催され、初日に事例集交流会、翌日に答志島内のエクスカッションを実施した。以下に事例集交流会で登壇していただいた方の意見を示す。



青木伸一さん（大阪大学名誉教授・海部会座長） ・海の問題解決のために流域圏での連携を！・

1960年代ごろから問題になっている内湾域の水質悪化や水産資源の劣化は多くの努力をしてきたがあまり改善されていない。それは、環境問題のスケールが管理者のスケール（河川、海岸、漁場など）を超えていることにある。海に関係する人々だけでは決して解決できない。



平賀大蔵さん（海の博物館 館長） ・海の恵みと変化について・

海の博物館は、漁師、海女、船乗り、そして海辺に住む人々が海と親しく付き合ってきた歴史と現在、未来を伝える「海と人間」の博物館である。水産資源の減少等を記録し、公開することが重要と考えている。なぜ水産業の為に水が無いのか問いかけていきたい。



1. 今期後半の活動実績（R6.4.1～R6.11.30）

流域圏担い手づくり事例集（テーマ①）

蔵治光一郎さん（東京大学大学院教授・山部会座長）
・伊勢湾・三河湾と流域の森林・

流木はかつてとても貴重な資源とされていたが、燃料革命によって価値のないゴミ同然のものとなった。流木を減らすための手段を考えるため、まず山・川・海の関係者が対話し、信頼関係を築くことが必要となる。



小田和人さん（海女の森プロジェクト）
・森と海を繋ぐことー海女の森プロジェクトー・

山に木が生えている方が自然豊かと思われてきたが、現在は大きくなり過ぎ、蒸散量が増えている状態である。適切な森林伐採を進めることで集中豪雨を減らし、森と海の豊かさにつながる。



岡田誠さん（三重県水産研究所）
・伊勢湾の貧酸素水塊の問題について・

貧酸素水塊の原因は成層の強化や水の動きが弱まることで海底に酸素が供給されないことが原因だと判明してきた。今後着目すべきは漁業対象種に限らず、出現種や生物多様性の変化だと考える。



米田紗歩さん、筒井千遥さん（22世紀奈佐の浜プロジェクト）
・22世紀奈佐の浜プロジェクトについて・

鳥羽市答志島での海岸漂着ごみが問題となっている中、ごみを出さない社会を構築し、豊かな海を取り戻すことを目的に2012年に設立された。流域内外の活動を通じて山から海まで新たな担い手たちとの繋がりを生み出すを目指す。



中村欣一郎さん（鳥羽市長）
・鳥羽市で取り組む海ゴミ問題について・

鳥羽市では様々な海ごみ問題に取り組んでいる。22世紀奈佐の浜プロジェクト、鳥羽のSDGsまなブック、海のシリコンバレー構想、海のレッドデータブック等の海ごみ・海岸清掃からも鳥羽の魅力を伝えている。



奈佐の浜海岸



奈佐の浜海岸
近くの湿地帯



海女小屋

○流域圏担い手づくり事例集交流会2024エクスカーションの実施

翌日は答志島でエクスカーションを実施した。奈佐の浜海岸のゴミの状況や、奈佐の浜の近隣に形成されている湿地帯に生息するトンボと湿地環境の変遷についての説明を聞き、その後海女小屋で新鮮な魚などを食べながら海女さんの貴重なお話を聞いた。

1. 今期後半の活動実績（R6.4.1～R6.11.30）

山村ミーティング・森づくりガイドラインの協働（テーマ②、テーマ③）

○「森の人をつなぐ」を刊行

2023年7月20日に流域3県4森林組合（根羽村森林組合、恵南森林組合、豊田森林組合、岡崎森林組合）の現場森林技能者が集まり「第1回矢作川流域現場森林技能者合同交流研修会」を実施した。この内容を広く知っていただくために「森の人をつなぐ」にとりまとめ、流域あるいは豊田の林業者の取り組みを正しく理解していただきたい。

この冊子を活用して情報発信を随時行っていく。



○夕立山森林塾と合同WGを実施

「高齢素人山主と若手山守りのヤマの終活談議」

丹羽さんは2024年6月に先代から継いだ小さな山林を佐藤林業で皆伐した。それまでの葛藤や決断、手続き、費用等を公開していただき、同じような葛藤を持つ山主の方に情報を発信した。山主、林業者の幸せを様々な立場（山主、事業者、行政、ボランティア、学生、研究者等）の方々と意見交換した。総勢45名の方が参加した。

まとめの会の内容を踏まえて追記予定



1. 今期後半の活動実績（R6.4.1～R6.11.30）

森づくりガイドライン（テーマ③）

○新たな水循環施策の方向性について

水循環基本計画に定められた森林の雨水浸透能力または水源涵養能力の整備の新たな施策の方向性について、これまで進めてきた「流域治水」から、流域単位での水力発電の増強や上下水道施設の再編等による、省エネ化を推進し、流域で治水とカーボンニュートラルに取り組み「流域総合水管理」に進化することを情報共有した。

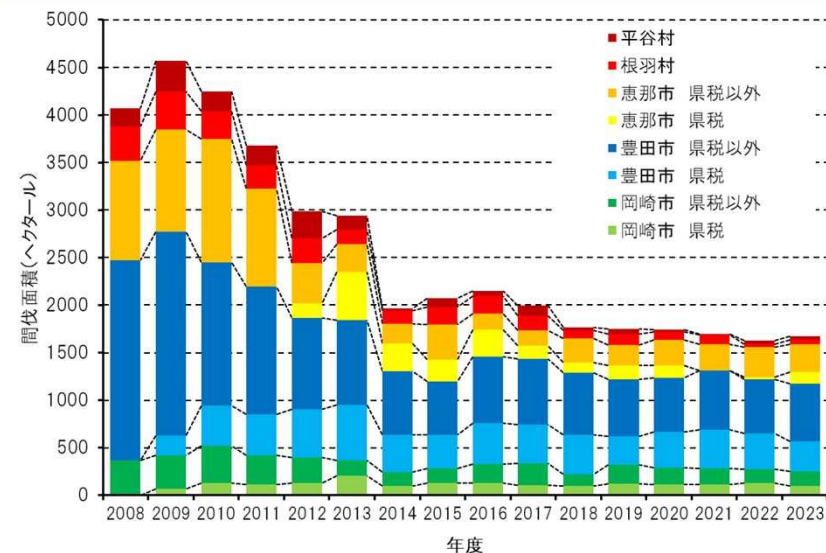
○令和6年度 第1回とよた森づくり委員会の情報共有

森林区分を4種類（木材生産林、針広混交誘導林、利用天然林、保全天然林）から2種類（人工林、天然林）に集約する提案があった。その中で、人工林は公益的機能の高い状態が、手入れ無しで維持される人工林として定義されている。

○矢作川流域圏での人工林間伐の状況

2009年から2014年の間に大きく減少しており、それ以降は2000ha前後で横ばい傾向。

2022年は傾向、間伐面積ともに前年と比較して大きな変化はない。



1. 今期後半の活動実績（R6.4.1～R6.11.30）

木づかいガイドライン（テーマ④）

○根羽村森林組合の活用事例紹介

木の糸プロジェクト、生分解性オイル、Jクレジット制度の取り組み、企業との連携による森づくり（more treesの森、シチズンの森）等を紹介していただいた。

○各自治体における木材の利用の促進に関する方針

今期から新たな取り組みとして「脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律」を矢作川流域の各自治体の方針を比較した。

まとめの会の内容を踏まえて追記予定

対象市町村：みよし市、安城市、岡崎市、刈谷市、恵那市、新城市、瑞浪市、西尾市、設楽町
知立市、半田市、武豊町、碧南市、豊田市、幸田町、平谷村、根羽村、高浜市

○根羽村・林業のミライ合宿活動紹介

根羽村での移住と林業の体験活動を実施。当初は学生が10名以上参加する予定であったが、台風10号の影響もあり、3名の参加となった。

「地域材を使う意味を考える」、「根羽村で遊ぶことを通して根羽村を知る」というテーマを基にFWを交えて活動した。今年中に参加できなかった学生と共にさらに深掘りしていく予定である。

2.山部会の活動目標

《第15期の活動目標（R6.11～R7.10）》

次の10年を見据えながら、山部会の展開を模索するとともに、4つの活動テーマ（山村ミーティングと森づくりガイドラインは協働）を軸として、情報共有と意見交換を行う。また、他部会との連携を通し、流域としての課題解決に貢献する。

第14期後半の活動目標を踏まえて15期を決定

<テーマ>

①流域圏担い手
づくり事例集

<活動目標>

- 持続可能な地域づくりにつながる活動を行っている団体に取材を行い、「流域圏担い手づくり事例集Ⅵ」を刊行する。
- 山、川、海のエリアと都市をつなぐ活動に着目した取材や、これまで流域圏に含まれながら取り上げてこなかった幸田町の団体への取材の可能性を検討する。
- 川部会、海部会を巻き込んだ流域全体の担い手を発掘する活動とする。
- 事例集の活用方法と、今後の事例集づくりの方向性について検討する。
- 事例集交流会を開催する。

2.山部会の活動目標

《第14期後半の活動目標（R6.4～R6.11）》

＜テーマ＞

＜活動目標＞

②山村ミーティング

- 山村ミーティングの実現のためには、林業技術者に直接意見を伺うなど、懇談会との連携を強化する（担い手の創出）。
- 矢作川感謝祭が林業関係者の交流の場として、どのような役割を果たすのか、開催を支援しながら再検討を行っていく。

③森づくり ガイドライン

- 森林経営管理法、森林環境譲与税、脱炭素社会の実現、ネイチャーポジティブ、人工林齢級分布平準化、スギ花粉症対策などの国の新たな動きを踏まえつつ、流域市町村の森林施策の着実な進行を後方支援し、流域圏全体として調和のとれた森づくりを目指す。
- 水環境基本法および水循環基本計画に定められた森林の雨水浸透能力または水源涵養能力の整備について、矢作川流域における関係省庁や地方自治体の施策をフォローアップする。
- 流域市村の間伐面積・皆伐面積の経年変化を整理し、要因等の情報共有を行っていく。

山村ミーティングと 森づくり ガイドラインの協働

- 流域での森林ボランティアを始め多様な森づくりに関わる人々の活動を総括し、流域圏懇談会山部会の働きかけで実現した矢作川流域現場森林技能者合同交流研修会の内容を取りまとめた冊子「森の人をつなぐ」（第14期活動成果）を流域森林組合や森づくりに関わる団体・個人に配布し、プロもアマも連帯した流域の森づくり運動の実現を目指す。（森づくりガイドライン協働）
- 流域外の森林組合や森林事業、森づくり関係団体や個人へも「森の人をつなぐ」を配布することにより、矢作川流域圏懇談会山部会の取り組みを発信する。（森づくりガイドライン協働）

2.山部会の活動目標

《第14期後半の活動目標（R6.4～R6.11）》

＜テーマ＞

④木づかい
ガイドライン

＜活動目標＞

- 矢作川流域内の各関係者が取り組まれている木づかい活動や推進テーマを「さあ～しよう」の形で提案していただくことにより情報を共有化し、流域内の身近な木を利用した木づかいが推進されるように「木づかいガイドライン」を作成する。
- 矢作川の流れを絆として、個人の思い入れを込めて流域が一体となることの大切さを伝えるアイテム「矢作川流域ものさし・私の流域物語」を有志で製作し、これを全国の各流域に配布することによって、全国の各流域において、その理念と製作方法を普及する。
- 「矢作川流域ものさし・私の流域物語」の理念とは、「流域はひとつ運命共同体」・「水を使うものは自ら水をつくるべし」といった全国にも通用する矢作川の流域思想であり、こうした思想と共にある矢作川流域圏懇談会の取り組みについて、全国の流域関係者に向けて発信する。
- 「私の流域物語」に記載された物語に関わる場所での「木づかいライブ スギダラキャラバン（木育キャラバン）」の実施や、個人の思い入れを尊重した木づかいによる市民創造型・労働参加型・課題解決型プロジェクトを実施する。
- こうした取り組みを通して矢作川の流域材を活用した楽しい「木のある暮らし」を定着させ「木づかいによる場所の力づくり＝プレイスメイキング」によって身近な生活空間を魅力的な地域空間に変革していく。
- こうしたプレイスメイキングに際し、地域住民や地域子どもたちが一緒になって活動することにより、特に子どもたちに対して、地域資源と共に生きていく様々な原体験の場を提供していく。
- 神奈川県山北町において開催された「大人の木育」の講師を務めた流域連携から、現在南都留森林組合との連携事業がスタートした。今後、道志村のキャンプ施設を対象とした森林づくりワーク及び木のアイテムによるプレイスメイキングを進めていく。
- 学童保育、森の幼稚園、里山等で森づくりワークを進めていくにあたり、それらの活動拠点施設及びトイレが必要である。愛知県の学童施設に愛知県産材のスギ材が「板倉構法」として使われており、こうした事例を参考に矢作川流域材を活動拠点及びトイレ等の施設に活用していく。